

2022 1S 月曜三限 歴史Ⅰ シケプリ

一年文三七組

作成者 栗田丈司

教員 井坂里穂

【インド概説】

<歴史・統計>

- ・ 大戦に疲弊したイギリスはインド帝国を解体せざるを得なくなった。
- ・ 国内では多数派のヒンドゥー教徒と少数派のムスリムが対立。連邦はインドとパキスタンに分離しそれぞれ独立した（1947）。前者はヒンドゥー教徒が、後者はムスリムが多い。
- ・ 71 年にはバングラデシュがパキスタンから独立した。
- ・ 人口：2011 年のセンサス（10 年に一度の国勢調査）では 12 億人。現在では 14 億人という推定も？
- ・ 面積：33 万平方km（伯、豪に次いで 7 位）

<言語>

- ・ ヒンディー語話者が全体の 43%。その他の地域言語が無数に存在し、話者の割合は低いが人口は多い。
- ・ 母語に合わせて「言語州」を形成するため、州の再編が行われた。
- ・ 連邦レベルの公用語としてデーヴァナーガリー文字によるヒンディー語を、準公用語として英語を指定。州レベルの公用語「州公用語」も当然存在。
- ・ 憲法第 8 附則では上記二言語の他にも 22 の指定言語を定めている。
- ・ 文学アカデミー賞は様々な言語の作品が受賞（少数派への配慮がなされている？）

<宗教>

- ・ ヒンドゥー 80%、イスラーム 15%、他多数（言語同様に割合は低いが信者数は多い）
- ・ カースト：ポルトガル語の「血統」を意味する語 casta に由来する言葉。定義はヒンドゥー教における排他的社会集団でありヴァルナとジャーティーからなる。
- ・ ヴァルナ：バラモン（司祭階級）、クシャトリーヤ（武士階級）、バイシャ（庶民階級、のちに商人）、シュードラ（隷属民、のちに第一・第二次産業従事者）、不可触民の位による身分制。インドに侵入したアーリヤ人が先住民支配のために用いた。当時は人々の肌の色を区別する語だったが、混血が進み身分・階級を表す語として定着。

・ジャーティー：職業・地縁・血縁的社会集団

*「カースト」という語はとても曖昧であり、様々な異なった用法がある。テスト対策において厳密に定義する必要はないと思われる。

・植民地化により土地の私有制が導入されると、雇い主世帯と奉仕カースト世帯との交換関係の集合からなる新たなジャジマーニーシステムが成立した。

*ジャジマーニー制自体は、職人カーストやサービス提供カースト（バラモンなど）に所属する個々の家が、農業カーストに所属する家や他カーストに属する家のために特定の仕事を世襲的に行い、その報酬として穀物やサービスを伝統的に定められた量だけ供給されるという制度であり、あくまで既存のものである。

・イギリス人の植民地政府はカーストを基準に司法・行政・教育や雇用の取り扱いを定め、また「カースト自治」を推進するなど、カーストを支配の道具に用いた。結果、人々のカースト意識は強化された。(18・19C)

・今日我々がカーストと認識するものの大部分は比較的近年の政治的・社会的発展により形成された、イギリス人とインド人の双方が主体的にこの過程に参加した、という理解が肝要。

【地域と食／気候と農作物】 *逐一暗記する必要なし

<穀物>

- ・概して乾燥地では小麦が、湿潤地では米が主食である
- ・またインドでは概して西より東のほうが降水量が多い
- ・主な米食地域：東部、北東部（ヒンドスタン平原）、西海岸
- ・主な小麦食地域：北西部（パンジャブ地方）
- ・西部や南部では雑穀も食される

<食用油>

- ・東部、北部：ナタネ油、カラシ油
- ・中部、西部：落花生油
- ・南部、西海岸：ココナッツ油

<ミルク>

- ・ミルク消費量は北西部で多く、東部で少ない

【食と歴史】

<中世>

- ・ムガル帝国（イスラム教）のアクバルは、ヒンドゥー教徒との融和政策の一環でジズヤ（異教徒に課した地税）を免除したほか、自身も肉食を控えた。
- ・アクバルの時代（16C 後半）には領土拡大や統治制度の整備がなされたために地域の交流が増加（食材・料理法が各地へ伝播）
- ・ヒンドゥー教徒は牛を神聖視し、一方でムスリムは豚を不浄とみなしていたため、牛肉や豚肉は好んで食べられなかった
- ・インドにおいて中世（新大陸の食材が伝播する 16 世紀以前）までは赤唐辛子は用いられなかった

<ヨーロッパ勢力のインド進出と食の変化>

- ・列強によるインド洋進出は「ヨーロッパの拡大」ではなく、古来より行われてきた交易に列強が遅れて参入したのだ、とする考えもある
- ・コロンブス交換：コロンブスが新大陸を発見した 1492 年以降、旧世界と新世界の間で病原菌やウイルス、動植物、人間集団、文化要素が交換されその後の歴史を形成したと同時に、地球上の遺伝的多様性が失われた原因となった。
- ・新大陸からポルトガル人の手によって 16 世紀インドにもたらされた唐辛子は、しかしながら 17c 末でも南部でのみ用いられた。マラーター勢力拡大の後北インドでもようやく普及した（伝播の地域差）
- ・ポルトガル人が新大陸から持ち込んだ作物のなかでも人気だったのはパイナップルやカシューナッツ。同時期にトマトやジャガイモも持ち込まれたが、これらの野菜がインドの食生活に定着したのはイギリス人が料理人にその使い方を教えたのちのことだった。（食材による伝播の違い）

<料理法の融合、ゴアの事例> * 逐一暗記する必要はない

* ゴア…1510 年にポルトガルに占領されて以降 20 世紀後半まで支配下に置かれた西海岸の州。クリスチャンが人口の 1/4 を占めるほど多い。

- ・インド風洋菓子の誕生：ゴアの料理人たちはインドの食材（ココナッツミルクやギー、米粉）でポルトガルのケーキを作った
- ・ゴア料理ヴィンダルー：ポルトガルの肉料理に由来。インドでは在来の香辛料やポルトガルを介して新大陸から伝わった唐辛子が用いられた。そのため「ヨーロッパ、アジア、アメリカ三地域の食の歴史が結びついた料理」とされる。

<「カレー」の概念>

・インドには元来「カレー」という料理は無かった。この概念はヨーロッパ勢力によってインドに押し付けられたに過ぎない。

・語源については諸説あり

* インド各地に多様な形で存在するスパイシーなスープ料理を、ポルトガル人やイギリス人が捨象し標準化して新しく生まれた料理がカレーだということ

【イギリスによるインド統治の歴史】

* 授業では英国東インド会社の設立からヴィクトリア女王のインド皇帝即位までの重要事件が紹介されたが、ここでは省略する。世界史Bの教科書などを各自で参照してほしい。

・英の統治理念は大きく2つ：在地社会の慣習を尊重すること（大反乱の反省）と、文明化の使命感（啓蒙主義の影響）

・二つの矛盾する理念のうち、英は前者を優先：サティ（寡婦殉死）などの女性差別、カースト差別などへの介入は消極的。

・悪しき伝統・慣習を批判したのは英語教育を受けた在地社会のエリート（中間層・ミドルクラス）

* 中間層とは在地の下位カーストとイギリス人支配者の中間に位置するという意味。

<ヒンドゥー教について>

・「ヒンドゥー教（英：Hinduism）」はインダス川以東の住人を指す古代ペルシア語「ヒンドゥー」に教義を意味する英語の語尾ismを加えた英語名称であり、インドの言葉で正確にこれと対応するものはない。

・教徒にとってのヒンドゥー教は信仰の体系というより社会習慣

・イギリス人植民者は在地人を尊重するために、ブラーマン（バラモン）の助言に従ってインドの価値観を理解しようとした。こうしてブラーマンの権威が植民地権力によって支えられ、彼らの価値観が正当化された。

・3つの神格とその任務

ブラフマー神：宇宙の創造

ヴィシュヌ神：宇宙の維持

シヴァ神：宇宙の破壊

<地域概念>

（例）マハーシュトラではシヴァージーの創設したマラーター同盟の歴史、

15・16世紀のバクティ思想（バクティ＝神への信愛）、この宗教的伝統と結びついた詩など

が地域の象徴となっている。

・近代にはこうした地域概念が知識人たちによって意識的に規定され、表現され、広められている→植民地期～独立後の州再編に影響

【植民地支配、ナショナリズム、食】

＜在地社会＞

・多様なインド料理は、微妙な差異に鈍感だったイギリス人と、そうしたイギリス人に迎合したインド人料理人の影響で単純に表象されるようになった

例)「カレー」の概念の創造、香辛料をあらかじめ調合した「カレー粉」の普及

・大反乱以降英人と在地社会の差異が強調され、また英人女性のインド移住が進んだことで、インドに「イギリス人の家庭」が生まれた。結果、食における本国志向が高まり、イギリス人専用区域も増加。

＜イギリス人家庭の食＞

・インド人使用人に依存

・イギリス人は往々にしてインド的食材や調理過程を衛生的に避けようとし、輸入品や家庭菜園・家畜飼育による自給を試みた。

・「汎インド料理」：インド在住のイギリス人が各地の食材や料理法を組み合わせでできた折衷料理。インド各地へ普及したが、あくまでイギリス人しか食べていなかったため、国民的料理とは呼べない。

【中間層における食をめぐる議論①・②】

①肉食、菜食をめぐる議論

＜植民地期以前のインドにおける肉食＞

・アユールヴェーダやマヌ法典において食における浄・不浄の観念や、「何を、どのように、誰と食べるか」を社会的地位や道徳観念に結びつける考え方が生まれる。ブラーフマナ（バラモン）は肉食を避けるべきだとの記述も。

*牛は神聖視されたので、牛肉が不浄とみなされていたわけではない。例えば牛乳は浄性が高いとされた。

＜植民地支配下での肉食、菜食をめぐる議論＞

- ・英語や西洋思想を学んだ在地のエリート「中間層」が、インド人としてのアイデンティティを模索→食をめぐる議論にも発展
- ・一方は西洋への憧れから「文明化」「近代化」の必要性を主張し、他方はインドの伝統を保持する重要性を主張した。
- ・ヒンドゥー教の上位カースト出身のミドルクラスは、西洋への憧れから肉食や飲酒を試みた（「肉食によってイギリス人のように強くなれる」という言説も）が、一方で菜食主義をヒンドゥーの伝統として主張し、精神的優位性の象徴とみなす見方もあった。
- ・改革の一環として浄不浄の観念やそれに基づく差別への批判もあったが（宗教やカーストの区別なく共食することを促すなど）、社会的地位喪失を恐れて改革に消極的な人々もいた。

* 女性のほうが食にまつわる改革に消極的な傾向が指摘されている。これは女性を「よき妻、よき母」として伝統や精神性と結びつける考え方による。

<ガンディーの見解> * ガンディーの衣食住には彼のインド観が反映されている

- ・ガンディーについて：上位カースト出身で両親は厳格な菜食主義者。肉食を試みたことはあるが、イギリス留学中に菜食主義思想に出会って以降は自身も菜食主義に。
- ・牝牛の保護運動 e.g. ムスリムに屠畜をやめるよう交渉
→ 憲法（1950）にある国家政策の指導原則（努力目標）では、搾乳用・役畜用の牛を保護し屠畜を禁じることが書かれている。理由はあくまで宗教でなく農業だが（世俗主義による）、ガンディーの思想の反映とも受け取れる。

~~~~~脱線~~~~~

- ・ヴェジタリアンは実際は人口の 3 割程度の少数派である。
- ・ジャイナ教徒は 9 割が、ヒンドゥー教徒は 3~4 割が、ムスリム・キリスト教徒は 1 割未満がヴェジタリアン
- ・下位カーストほど肉食が普及。一部の SC（指定カースト、ダリト、かつての不可触民）は牛肉食もしていたが、社会集団の融和が進み肉食はされなくなった。
- ・いずれの宗教コミュニティにおいても女性のほうがヴェジタリアンの割合が高い。とくにヒンドゥー教徒に関しては、先述のジェンダー観が影響していると思われる
- ・ヒンドゥーナショナリズム：インド人民党（BJP）を中心に 1980 年代後半から台頭した原理主義的な政治思想。肉食（とくに牛）への激しい批判し、牛肉を食べたダリトやムスリムを攻撃した。彼らの主張は、インドにおける多数派のヒンドゥー的な文化・伝統・宗教的感情を尊重すべきだ、というもの。

~~~~~

② 飲酒をめぐる議論

- ・ 19 世紀後半、植民地政府は税収のために酒税を導入

→酒市場は独占され、品質低下&価格上昇

・農民の間では抵抗のために、中間層では英米の宣教師たちの影響で、それぞれ禁酒運動が流行

・ガンディーも禁酒運動を促進→禁酒は菜食と同様に上位カーストの象徴に

・国家政策の指導原則（努力目標）では健康の観点から禁酒を求めている

【宗教と食】

～植民地支配下の宗教的マイノリティーの視点から～

＜ムスリム知識人たちの食をめぐる議論＞

・イスラームの食の規範：豚肉食と飲酒の禁止、ラマダーン月の断食のほか、食事中は靴を脱ぐことが推奨される

・イギリス人は調理の仕方に関するカーストや共同体の制約を慎重に考慮していた

e.g.鉄道の駅では、イスラーム教徒とヒンドゥー教徒には別々の水運搬人や紅茶売り場が用意されている

・しかし、こうした善意による区別は異なる共同体の差異を強調し、コミュニズムを助長した。

※コミュニズム【communalism】 字義としてはある**共通の利害・職業・言語・宗教で結ばれた社会集団**が、他と区別して自らの**特質あるいは優位性を強調せんとする思考様式**であるが、インド史では特に同国の二大宗教であるヒンドゥー教とイスラムの信者間の関係について用いられる。

＜パールシー知識人たちの食をめぐる議論＞

～～～～パールシーについて～～～～～～～～～～～～～～～～

・パールシーとは「拝火教」としても知られるゾロアスター教の信者のこと

・8～10世紀にイラン（パールス）からインド西部へ移住したことが名前の由来

・ヨーロッパ勢力のインド進出に伴い、通訳や仲介者を担うようになって経済的・社会的地位上昇

・イギリス植民地期には多くのパールシーがボンベイに移住。英語による高等教育を受け、官職や専門職、商業、工業の分野で活躍。

・パールシーはインド総人口の0.03%で、このうち5割超がボンベイ在住

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

・パールシー中間層向けの料理書に「パールシー料理の特徴は、イランやインド、イギリス料理の要素を含むこと」という旨の記述がある。この記述からパールシー知識人たちの持つ以下のような自己イメージがうかがえる。

自分たちの料理は自分たちの歴史を反映している
自分たちはイランに起源をもつゾロアスター教徒である
移住先のインドで現地社会の慣習を取り入れ、現地の支配者に忠誠を尽くしてきた
インドに貢献し、深く関わってきた
植民地期にエリートとして台頭した（自負）

<シク教> *補足情報とのこと。試験には出ないかも

- ・ナーナクが 16 世紀に創始した、教徒がターバンを頭に巻くことで有名な宗教
- ・インド大反乱（1857～1858）ではイギリス政府に協力し、また総じて教育水準が高かったため中間層として位置付けられ、官吏や軍人として登用されるなど社会的に活躍する教徒が多い。そのためか「インド人はターバンを巻いている」と誤ったステレオタイプが広まっているが、実際は人口の 2% に満たない少数派である。
- ・印パ分離独立の際にパキスタン領の教徒が流入したことでパンジャブ州西部でシク教徒の割合が増加。新州設立運動が起こり、15 年の歳月を経て旧パンジャブ州西部が分割され新パンジャブ州が設立した。

<ジャイナ教>

- ・前 6～5 世紀にヴァルダマーナが創始。禁欲、不殺生、相対主義を信条とする。
- ・彼らの食は不殺生を遵守すべく極めて厳格に規定されている。

e.g. 酒…酩酊時に誤って殺生するかもしれないのでタブー

イチジク…内部に昆虫が存在しうるためタブー

根菜類…組織に微細な生物が生息しているためタブー

日没後の食事…暗い場所で誤って虫などを口にしないためにタブー

<仏教>

- ・ゴータマ・シッダールタが前 6 世紀ごろに創始。バラモン主義やカースト的身分秩序を批判
- ・後に興ったヒンドゥー教に信者を吸収され、インドでは衰退
- ・アンベードカル（1891～1956）：インドの身分差別打破に尽力し、50 万人の不可触民を率いてヒンドゥー教から仏教へ改宗した。

【カーストと食】

*内容は英文を要約する課題のみ。「ダリト（被差別民）には牛肉食習慣があったが、経済成長によって異なる社会集団の融和が進んだ結果、上位カーストの慣習が優先され、ダリト出身者も牛肉を食べられなくなった。」という内容を抑えれば OK

【ジェンダーと食】

- ・植民地期の中間層には以下のようなイメージ・イデオロギーがあった

（男性…外、世界、近代的、物質的領域
女性…家、伝統、精神的領域）

・植民地期の中間層向けの料理書や家事指南書では、女性の料理が家族愛の象徴として表現された。

・「よい台所がよい妻を、よい妻が健康的な料理を、そして健康的な料理が強力な国家を作り出す」という記述からは、ナショナリズムに伴っていわば良妻賢母イデオロギーが生まれたことが分かる。

【衣からみる植民地期インド】

*言うまでもなく衣服は「自分が何者であるか」を自他に表明するものである。植民地期インドのエリート層には、既存の社会集団に帰属しているというアイデンティティ（インド国民であり、上位カースト出身であるという自意識）に加え、「啓蒙された近代的な個人である」というアイデンティティが芽生えた。そのため中間層を中心に、「何を着るべきか」は活発な議論の対象となった。実際、程度の差異はあるものの彼らはインド的な服装にヨーロッパ的な要素を取り入れていた。

<ジェンダーと衣>

- ・植民地期の中間層には以下のようなイメージ・イデオロギーがあった（前述）

（男性…外、世界、近代的、物質的領域
女性…家、伝統、精神的領域）

- ・サリーの近代化

例 ・貞淑の観点から肌の露出が減少

・「インドの伝統服＝サリー」という標準化

・女性はインド的なものの表徴と化し、例えば家族写真ではしばしば夫と子が洋服を、妻がサリーを纏った

・ガンディーのカーディー推奨と結びつき、よりシンプルに（後述）

・民族服としての記号的意味を獲得

・ファッションへと変貌

・身体の成熟につれて、女性の衣服はより露出の少ないものになり装飾品が増える一方で、男性は髭を蓄え、長ズボンを穿くようになる。こうして性差が外面的に強調される。

・しかし男性は、女性に比べると年齢を重ねても身体表象に差異があまり出ない

・外面的な差異だけでなく、女性は初潮を迎えると行動範囲が制限され、未婚女性と既婚女性とでそれぞれ期待される行動様式を身に着けていく

<衣とナショナリズム>～ガンディーの衣をめぐる試み～

・ムスリムとヒンドゥー教徒の対立を図ったベンガル分割令（1905）が発せられると、これに対する反発から民族運動が激化し、反対運動の一環としてスワデーシ（国産品愛用、外国製品ボイコット）運動が興った。

・インド帰国後、ガンディーは機械生産を近代文明の罪として批判し、手紡ぎと手織りの奨励運動を行った。

＊手紡ぎに用いる糸車をチャルカー、手織り布をカーディーと呼ぶ

＊この運動は非科学的な精神論にのみ立脚するものではなく、失業中のインドの女性に雇用を供給するための手段としての側面もあった。

・カーディーは大量生産が困難なことから供給が不足し、また高価だったので、「疑似カーディー」なる手織り風の機械製綿布も流通した。

＊ガンディーの女性観もまた、現代的なそれとは異なっていることに留意してほしい。彼は母性愛を強調し女性こそが非暴力を体現するとして女性の運動参加を促進した。一方の性別にだけ寛容さや包容力を期待することは非対称的だろう。

【住まいからみる植民地期インド】

<生活空間とジェンダー>

・生殖能力のある（初潮から閉経までの）女性は行動範囲を厳しく制限された

e.g.若い女性は家を出てはいけない／月経中の女性は不浄とされ、参拝や料理をできない／女性は男性や子供が食事をしたのち、残り物を食べる

<都市の住まい>

・コロニアル建築：母国の（ヨーロッパ的な）建築様式に現地の要素（建材・様式）を取り込んだ植民地特有の様式。植民地政府の権力や「西洋近代」の象徴となった。

・白人とインド人のセグリゲーション：「ホワイトタウン」「ブラックタウン」などの区別

<ボンベイ市>

・ポルトガル植民地からイギリス植民地へ

・東インド会社のもとで商業的に繁栄、「コスモポリタン」な大都市に

・出稼ぎのために人々が流入したため、人口の6割は男性、7割は他所の出身

・衛生環境が悪化しペストが流行

・白人とインド人、またインド人の中でも異なった社会集団は別々に居住（ペストとの関係は明言されず）

・インド人富裕層や白人が郊外へ流出する現象も（今でいうインナーシティ問題？）

<バンガロー>

- ・「ベンガルの」を意味する植民地インドで発達した住居形式で、世界各地に普及。
- ・日本にも明治末期に中流階級向けの住宅モデルとして紹介された。
- ・起源はベンガルの在地の住居とも、イギリスの住居とも言われていて定かでない

<ガンディーの住まい>※ガンディーの衣食住には彼のインド観が反映されている。

- ・南ア時代：菜食・禁酒・禁煙のもと、宗教やカーストの区別なく支持者たちと共食・共住
 - *ここでも料理は女性の仕事とされた
- ・インド帰国後：アーシュラム（修行所）で、不可触民をも受け入れて共同生活
 - 反発も生じた（資金援助の停止など）
- ・排泄物はたい肥に活用するなど、自給自足の規律的な生活

【追記】シケプリに欠損していた情報があります。

・禁酒とナショナリズムの結びつきは、中間層が飲酒を植民地支配の産物として位置付けたことによる

・上位カースト（中間層）では、英米の宣教師や禁酒運動家の影響で禁酒運動への関心が高まったが、飲酒を是としない風習は古来からあった